

「グローバルCOEプログラム」（平成20年度採択拠点）事後評価結果

| | | | |
|-----------|-----------------|------|--------|
| 機 関 名 | 神戸大学 | 拠点番号 | G11 |
| 申請分野 | 数学、物理学、地球科学 | | |
| 拠点プログラム名称 | 惑星科学国際教育研究拠点の構築 | | |
| 中核となる専攻等名 | 理学研究科地球惑星科学専攻 | | |
| 事業推進担当者 | (拠点リーダー名)中川 義次 | | 外 22 名 |

◇グローバルCOEプログラム委員会における評価（公表用）

（総括評価）

設定された目的は十分達成された。

（コメント）

大学の将来構想と組織的な支援及び拠点形成全体について、本プログラムは、北海道大学を連携先機関として、惑星科学研究センターを構築し、大学間のみならず国内外の惑星科学コミュニティ全体の拠点形成を目的としたものであり、神戸大学では、本事業を中核的な研究と位置付け、神戸市ポートアイランド地区に本拠点のための広いスペースを確保し、学長裁量枠定員の付与などによる積極的な支援を行った。また、北海道大学との連携については、IT技術を駆使し、若手を中心となりセミナーや国際スクールを展開して、力強く推進した。本拠点は、遠隔地2大学の連携という、挑戦的かつ困難を伴うものであったが、研究面では、両者の強い面が相補的な効果を発揮し、また、挑戦的な運営の必要性が、若手の交流やweb教育媒体の活用というような新しい教育モデルを生み出したことは、この拠点形成に大きな意味があったことを示している。

人材育成面については、人材交流が、大学間のみならず、惑星科学コミュニティ全体に広がり、大学院学生や若手研究者の惑星科学研究が活性化し、全国的な教育ネットワーク構築まで発展したことは、高く評価できる。また、当初、2大学間の連携、国際的な人材の活用・育成などに懸念があったが、webの活用による拠点活動の公開やwebの教育媒体としての活用などを通じて積極的な連携が図られ、定期的に国際プラネタリスクールを開催し、グローバルな視点から教育研究の展開が実行された。ただし、外国人留学生の数が期待したほど増えなかったのは残念である。

研究活動面については、系外惑星の大気海洋科学、天体衝突科学などの分野で先端的な研究を進展させ、神戸大学－北海道大学の連携シナジー効果が発揮された。論文の執筆率は高いとは言えないが、本拠点の存在感が惑星科学コミュニティの中で高くなってきたことは評価できる。

補助金の適切かつ効果的使用については、大学からの支援も含めて効果的に使用され、特に、2大学間の連携促進に、十分に留意して使用された。

今後の展望については、2大学連携の効果をどのように継承してゆくのか、また、惑星科学コミュニティの期待にどのように答えてゆくのか、などの課題があり、関係者の今後の努力に期待したい。